彼女戦線異状なし

五朗八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女戦線異状なし

【Ｎコード】
Ｎ１４４７ＢＡ

【作者名】
五朗八

【あらすじ】
２０２５年。人類は突如として現れた人間の天敵生物「ハンター」。人は彼らとの存亡を賭けた戦いに敗れ、その大半を駆逐され、滅亡に瀕していた。そんな状況の中、わずかながらに抵抗を続けるＥＵ軍の美人士官であるアクリエール技術少佐（ちなみに人妻）は、人類の反撃用兵器である「アルティメットブレイズ」を輸送中に不思議な能力を持つ少年「高杉紳作」に出会う。
この物語は滅びゆく人間の時代に生きる少年とそれを取り囲むヒロイン（複数）との愛と勇気のサバイバル物語。

襲撃？（前書き）

登場人物
アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット
１９歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。
アンリ・ジャービス
１５歳でアクリエールに使える執事の少年　アクリエールに忠実な家事完璧な美少年
レイノルズ中尉
美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

北へ、北へ・・・軍用ジープに先導された1台の大型トレーラーが夕暮れの道をひた走る。普通なら仕事から帰る車や物資を運ぶトラックが往来してもおかしくないこのＥＵの大動脈たる国道だが、今は一台も車は見当たらない。

先行するジープには、ブルーのヘルメットに防弾ジャケットに身を包んだ男たちは、ＥＵ軍所属の兵士たち。運転する若い兵士はもとより、助手席に座る将官も後部座席のベテランの兵士もグッと前を凝視している。猛スピードのため、すさまじい風切音で肉声は聞き取れないが、かぶっているヘルメットにヘッドフォン機能がついているため、お互いにコミュニケーションは可能な状態ではある。だが、誰一人話さない。

彼らの任務は後方のトレーラーに積まれた荷物と一人のＶＩＰの護衛。このお荷物を２００キロ離れた地点まで行くのだ。そうすれば、また比較的安全な地下にもぐりこめる。

（奴らに見つかったら・・・。）

ジープの助手席で指揮をとるレイノルズ中尉は思わずつぶやいた。その声は車の風切音にかき消され、音にはならなかったが、そう、奴らに見つかったら「終わり」である。手に持った銃器は「奴ら」には効果がない。これは同族（人間）に対するものだ。同じ人間が略奪のために襲い掛かってくるの可能性がある。だが、奴らに比べれば脅威ではない。少なくとも同族は武器で排除できるからだ。

前方にうっすらと赤い光の点滅を発見した。どうやら中継地点だ。

任務は予定どおり遂行されている。ここで燃料を補給し、食料を補給するのだ。そうすれば、あと2時間と少しでこの危険な任務は終わる。
国道沿いのうらぶれたガソリンスタンドにジープが停車する。すぐさま、2人の兵士が降りる。辺りを警戒しながらトレーラーの停止を待った。スタンドの建物から先ほどまで光っていた赤いライトを手にした小太りの小男が近寄ってきた。

「レイノルズ中尉でありますか。」

「ああ、そうだ。」

助手席の将官・・レイノルズと呼ばれたEU軍中尉は年の程20代後半であろうか・・、くすんだ金色の短髪にがっしりとした長身だが、戦場の場数を踏んでいないせいか、少々、声を上ずらせて応えた。

「エージェント108です。予定どおりですな。昨日からここに張ってますが、大丈夫です。この周辺には奴らはいませんぜ・・。」

小男の方はずいぶん年上だが、階級の上の青年にへりくだったような口調で話しかけてきた。若い中尉は奴らがいないと断言するその男に少々いらだった・・（どこにそんな保障があるのだ・・・。）心の声が声になった。

「なぜ、そんなことが分かる・・。」

「いや・・臭いですわ・・臭いで分かるのですよ。中尉殿」

「臭い・・そうなのか？」

根拠のなさそうな小男の答えだったが、信じたい一心の中尉にとっては、信じたい言葉であった。実際、この若い中尉も「奴ら」とは相対していない。奴らに襲われた現場なら何度も遭遇したが、あの地獄のような光景から察するに、もし、出会っていれば自分はこの世にはいないだろう。

「匂いといえば・・この匂い・・ＶＩＰはいい女ですな・・。」

エージェントが見つめる先にその人物が現れようとしていた。トレーラーから降りてきた兵士に混じって、この男だらけの光景にそこだけが輝いているかのような・・白いタイツに包まれたすらりとした長い足に白いブーツ、黒の高級将校用軍服にＥＵ軍の記章を付けたベレー帽をちょこんとかぶったうら若い女性が地面に降り立ったところである。

エージェント１０８は、少々、嫌らしい目でその女性の足先から頭のてっぺんまで見ると、急に真顔になった。

「あれは、技術少佐の階級章ですな。年増の色っぺえ姉ちゃんかと思いきや、まだ小娘じゃないですか。」

上官に対しての無礼な台詞ではあったが、階級と似合わない今回のＶＩＰに対してレイノルズもつい、知り得ている情報を話してしまった。

「アクリエールＥＵ軍技術少佐・・元はイギリスの貴族のお姫様らしい。年は１９歳。今はプランタジネット・・なんとかの奥方だそうだ。」

「１９歳で人妻ですかい。これはこれは・・・旦那はロリコンですな。」

はは・・つい小笑してしまったレイノルズであったが、かれ自身２６歳。１９歳で結婚したという年下の上官を初めて見たとき、あまりの可憐さと美しさに我を失い、敬礼するのを忘れてしまった思い出があった。後で彼女がバイオ技術とロボット工学で博士号を持つ天才少女で、しかもＥＵ軍少佐・・イギリス貴族のお姫様にて、プランタジネット公国大公夫人と聞いて、そのありえない肩書きに面食らったものだ。

当の美しい少佐は、透けるような見事な金髪の長い髪をベレー帽からゆらし、細身の体に不似合いな豊かなバストと引き締まった腰、そして絶妙なバランスの細い足を惜しげもなく女性将校用のスカートから出して軽やかに近づいてくる。少しだけつり上がった目は気の強さを感じさせるが、パッチリとした大きな目に輝く青い瞳。形のよい鼻にピンクの唇は男性誌のグラビアに登場させても不思議でない美貌だ。それでいてエロチックな感じがしないのは全身からでる清純なオーラなのか、ＩＱ２００は超えると噂される頭脳への先入観なのか・・。後ろに従卒の少年を従えて、美しい少佐は指示をてきぱきと下す。

「アンリ・・みなさんに熱いコーヒーを配りなさい。それから、トレーラーの荷物の確認。
あっ、レイノルズ中尉。ここの滞在時間は・・。」

「はっ。２５分の予定です。兵士４名が定位置につき警戒中。燃料補給を終わり次第、出発します。」

「中尉・・兵士にＰＢ型装備をさせた方がよくないでしょうか。」

アクリエールはレイノルズに同意を求めた。その瞳は薄暗くなって見えにくくなった道路の先を見つめている。

（なんだか、嫌な予感がする。）

アクリエールは不安を振り払うように語気を強めた。

「ＰＢ型装備をさせましょう。」

「ＰＢ型ですか・・。」

レイノルズは考えた。「奴ら」用のＰＢ型装備。今、展開している２０ｍｍ機関砲と兵士が個々に持っているアサルトライフル、マシンピストル・・といった装備から、「奴ら」用に特化した武器に持ち変えるのだ。だが、これらの武器は「奴ら」に効果があるとはいえ、火力的にはかなり劣る。「奴ら」よりも同族の人間の方が脅威な場合もある。「奴ら」の目から逃れ、隠れるように暮らしている人間は生きていくために食料を奪い合う。「奴ら」に見つからないように暮らすには食糧生産などできず、過去の遺産である保存食料の奪い合いで生き抜くしかない。「奴ら」に狩られるよりも同族である人間の襲撃で命を落とす確率の方が高い。それにＰＢ型装備いえども、奴らに効果がある保障はない。通常兵器の火力で押し切り、「奴ら」を退散させたという話も聞く。

「少佐・・すでに兵士の配置も済んでいます。大丈夫です。このまま、待機しましょう。」

「そうですか・・。現場指揮官は中尉ですからその決定に従います。」

通常、少佐というレイノルズから見れば階級が上の将校なら、自分の意見を押し通すものだが、アクリエールは自分の立場をわきまえていた。自分の役割はトレーラーの荷物を運ぶこと。護衛部隊の指揮官は中尉であって自分ではないこと。そして、戦場では経験の差がものをいうこと。戦いも経験がほとんどなく、他の軍人から見れば１９歳の小娘に過ぎない自分が「命令」を押し通すことのデメリットを考慮したのだ。

襲撃？（前書き）

登場人物

アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット

１９歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。

アンリ・ジャービス

１５歳でアクリエールに使える執事の少年　アクリエールに忠実な家事完璧な美少年

レイノルズ中尉

美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

「お嬢様、ティーをお持ちしました。」

従卒のアンリがポットから注いだお湯で紅茶を入れ、年代物のおしゃれなティーカップを差し出した。彼は実家であるノインバステン家から一緒についてきた執事の少年。年は１５歳。灰色の髪を後ろで束ね、まだ成長途中ながらなかなかの美少年である。背はアクリエールよりも低いから、遠くから見れば姉と弟のようにも見える。だが、先祖代々ノインバステン家に仕えてきたこともあり、絶対服従の忠誠心は遺伝子レベルで染み付いている。アクリエールがプランタジネット家に嫁いでも彼女専用執事として、それこそ朝から晩まで付き従っているのである。軍ではアクリエール付きの従卒で上等兵待遇である。

兵士たちには紙コップでインスタントコーヒーを配ったアンリは、崇拝するお嬢様には、とびっきりの紅茶葉をティーポットで入れる。戦場だから、ミルクやレモンといったものは用意できなかったが、香りの良い紅茶は中国から来たというキーマンティー。渋みの少ない糖蜜のような甘さが味わえる高級茶葉から抽出される味は、プランタジネット公爵夫人にふさわしい飲み物だ。

アクリエールが一口口をつけるとタイミングを計らって、アンリが一丁のハンドガンを手渡す。

「お嬢様。ＰＢ装備。お嬢様だけでもお持ちになっては。」

慣れた手つきでマガジンをはずす。弾倉から覗く青色の弾頭は、ＰＢ装備の証。フルオートマチックで１５発発射できる。それに予備

マガジンを一つ、大切なお嬢様に手渡した。

アンリ自身、肩にＰＢ装備の主戦武器である携帯ハンドランチャーをかけている。この武器は「奴ら」に対して人類がささやかな抵抗を行うために開発されたものであるが、効果の程は未知数である。両武器とも当たれば効果があるが、高速移動してくる「奴ら」に当たる保証はない。なにしろ、マシンガンで武装した兵士３人が猛射撃したところで、その雨のような弾丸をかいくぐり、一撃で兵士たちをなぎ払うのである。

「アンリ・・・ごめんなさいね。こんな危険なところに付き合わせてしまって。」

飲み干したティーカップを戻し、アクリエールはアンリに優しいまなざしを向けた。

「いえ、お嬢様。仕方ありません。あれの開発はお嬢様にしかできませんし、この度、完成したことで人類に光が見えてきたのです。量産されて実戦配備されれば、もうお嬢様がこんな危険を冒すことはないでしょう。あと１日。合流ポイントまでいけば、安全です。」

「そうね。」

ここから１００キロほどの合流点。やつらの勢力範囲からはずれたところで、大型ヘリに移る。それで２時間も飛べば、目的地・・・人類の組織的反撃の拠点。ＥＵ軍旗艦超大型空母「ジャンヌダルク」である。

エージェント１０８と呼ばれている男は、自分が特別な嗅覚を持っていると確信していた。

特に奴ら…（人間はこの種の生物にハンターと命名していたが）…その臭いは、ハンターが接近し、危険なエリアまで進入する前に捉えることができた。そのおかげで、この仕事を長く続けていると自負している。多くの仲間はハンターに襲われ命を落としているが、自分だけは事前に臭いを察知し幾度となく何を逃れてきた。

だが、この夜は彼の嗅覚は役に立たなかった。というより、危険な臭いを感じた時には絶望を感じたからである。突然の強烈な臭いは、逃げる時間を与えない近距離であることを示していた。

（なぜだ！今までこんなことは一度たりともなかった・・。）

無駄と分かりながらもエージェントは廃墟の建物の机の下に身をかがめた。ハンターの嗅覚からすれば、どこに隠れても無駄であることは、同じく人並みはずれた嗅覚で生き延びてきた彼にとっては皮肉ではあったが・・。

襲撃？（前書き）

登場人物
アクリエール・ラ・ノインバステン・プランタジネット
１９歳で超絶美人で貴族令嬢で人妻で技術少佐というありえねえヒロイン。
アンリ・ジャービス
１５歳でアクリエールに使える執事の少年　アクリエールに忠実な家事完璧な美少年
レイノルズ中尉
美しい上官と秘密兵器を輸送中の若き小隊長

襲撃？

少年が持ってきたコーヒーをすすり、薄暗くなった空間を食い入るように見つめる。ラルゴ上等兵は２０ｍｍ機関砲を構え、発射ボタンに指を置いている。いざとなったら、毎分４０００発の弾丸を打ち出す。この破壊力に生身の生物なら何一つ生き残れないはずである。

だが・・・

「な・・なんだ！」

光が見えた。二つの赤い光。ゆらり、ゆらりと揺れながら明らかに前進してきている。

「間違いない・・奴らだ！」

ラルゴ上等兵の指が発射ボタンを押す。すさまじい発射音と同時に叫ぶ。

「緊急事態・・奴らです」

すさまじい弾丸を潜り抜け・・いや・・何発かは確実にヒットしているはず。だが、ヒューマンハンターである「奴ら」は特殊な障壁をはりめぐらし、物理的な攻撃はほとんど弾き飛ばす。それでもその障壁を突き抜けていくばくかの弾が突き刺さっていく。しかし、その程度の衝撃はたちまち、超高速再生で傷がふさがる。前進を止めることはない。

レイノルズ中尉の耳に上等兵の断末魔の声が届いた。

「3時の方向、集中砲火・・打て」

小隊長の命令で部隊は一斉に古ぼけたガソリンスタンドを囲むように配置した仮設陣地から２０ｍｍ機関砲を叩き込む。

「少佐・・中に」

レイノルズ中尉は、アクリエールに向かって叫ぶ。その美しい上官と御付きの執事の少年が建物に入ったことを確認した若き中尉にさらなる複数の断末魔の声が・・そして銃撃音が止んだ。４機の機関砲仮設陣地が沈黙した事実・・そう「奴ら」１匹ではない。レイノルズが腰のハンドガンに手を掛けたとき・・大きな影が正面に立っているのに気づいた。ヒグマほどの巨体。通常４つ足で移動するそれは、攻撃時に後ろ足で立ち上がり、強烈な前足による攻撃を行う。さらに上あごから突き出た2本の牙で噛み付く。胴体は熊に近いが、皮膚は爬虫類の鱗のようであり、顔には毒々しい角が2本生え、赤い目がぎらりと光る。

レイノルズは夢中でハンドガンを連射する。だが、至近距離の銃撃も奴ら・・正式名称として人間は「ハンター」と命名していたが…その特殊な障壁（人類はHシールドと名づけた。）にはじかれる。冷たい汗が頬を伝う・・・

「終わった・・」

一言つぶやき、レイノルズは目を閉じた。一撃の痛みとともに恐怖を感じなくなった。

襲撃？

アンリはこの絶体絶命のピンチに冷静に辺りを見回した。ガソリンスタンドの建物は表に面した部分はすべてガラス張りで、奴らの攻撃を支える強度はない。カウンターの下にエージェント１０８の剥げた頭が月夜にきらりと輝いたが、そこで震えている太ったオヤジに期待はできない。大切なお嬢様を守ってこのピンチを凌ぐ。アンリはその一念で恐怖をぐっとこらえた。

「お嬢様・・奥へ」

裏口へ続く扉を開けて、アクリエールを進ませる。細い通路を抜けて、ドラム缶が山と積まれた倉庫を目指す。後方でエージェントの断末魔の叫びが響いたが、かまわず前進する。

だが、前を行くアクリエールが突然、立ち止まり銃を構えた。そこにはもう一頭のハンターが仁王立ちしていたのだ。アンリはとっさに大切なお嬢様の前に出て、ハンドランチャーの引き金を引く。白く輝くプラズマ弾が渦を巻き、前方に射出される。だが、すさまじい前進エネルギーがハンターのＨシールドにあたり、それ以上進まない。

「Ｈシールド！！・・お願い・・」

アクリエールが叫ぶ。ハンドランチャーの至近距離による射撃のＨシールド突破率は理論上５０．８％・・低くない数字だ。突き破り、ハンターの生体組織を焼きつくす確率はさらに８３．３％に跳ね上がる。例え、失敗しても体に命中すれば２撃目でトドメを刺せる。

ギューイイイイン・・突き破った・・光を放ってＨシールドが破

れるように光の弾が飛び出し、ハンターの皮膚に命中・・大きな穴が開く。だが、焼き尽くすまでに至らない。Ｈシールド通過時にエネルギーを消耗したのだろう。大きな穴が再生を始める。だが、間髪いれずにアクリエールがハンドガンを一発放つ。青い弾丸・・ＰＢ弾・・。

ＰＢ弾とは弾の先端にボツリヌス菌の毒素を仕込んだ弾で、ハンターに当れば麻痺を引き起こす。この状態で麻痺すれば、再生が止まり、さすがのハンターも死ぬしかないだろう。

すでにＨシールドがないハンターの胸にＰＢ弾が突き刺さる。たちまち、大きな巨体が後方に倒れこんだ。

２人はすぐ倉庫の鉄製の扉を開ける。幸い、鍵はなく入ると扉を閉めて角材をドアに固定する。この程度ではハンターが開けようと思えば、なんの抵抗もなく開くだろうが、気休め程度にはなる。倉庫の中は天井まで届く燃料入りのドラム缶に、フォークリフトが一台放置されている。２人はドラム缶の陰に倒れこむように座ると荒い息を静めるように押し殺した。１体は倒したが、奴らは確実に複数存在する。まだ絶対的なピンチは続いている。アンリは息を整えるとそっと話しかけた。

「お嬢様・・お怪我はありませんでしたか」

「ええ・・」

青ざめているが美しい顔を上げてアクリエールはそう答えた。頬に少し泥汚れが付いている。アンリはそっと胸のハンカチーフを取り出し、大切なお嬢様の頬を汚す泥を拭う。

「部隊は大丈夫でしょうか」

アンリに聞くでもなく、アクリエールはつぶやいた。アンリが答えるでもなく、おそらく全滅・・そして間違いなくこの場所もかぎつけられる。先ほど、一体を葬ったのだが、奴ら、ハンターはあの凶暴さにも関わらず知能は高く、仲間意識も高い。復讐に血眼になることは間違いない。

アンリはドラム缶の陰からそっと顔を出し、暗闇に慣れた目で倉庫内の様子を伺う。扉のすぐ横に作業用の机がある。フォークリフトは使えそうだが、残念ながら鍵はついてなさそうだ。

（何かないか・・。）

そっと立ち上がるとアンリは裏のガラス窓をそっと開ける。外は草むらの傾斜になっており、その下はちょっとした森になっている。だが、その先に建物らしき陰が密集したものが見えた。小さな村だ。しかも微かだが、明かりがともった場所がある。ハンターの前では助けにはならないが、あそこなら隠れる場所もあるかもしれない。だが、あそこまでは1キロ近くはある。高速で走る車でもない限り、今襲われているハンターの追撃をかわすことは難しいだろう。

頭を軽く振って、アンリは作業机に向かう。引き出しを開けると黄色く変色した紙の束、使いかけの鉛筆、何かのカード・・スタンプ台に黄色いプラスチックのタグがついた鍵が一つ。そして、使い捨てのライター・・。それだけ・・。だが、姫に仕えるこの忠実な執事の脳裏に何か閃いた。

アンリはすばやく鍵とライターを掴むと、フォークリフトに駆け寄

り、鍵を差し込んでみた。

（ドンピシャ・・。）

動きそうだ。エンジンを回さないようにそっと鍵から手を離すとアクリエールの隠れるドラム缶の陰に駆け込む。

「お嬢様・・。私が囮になります。裏窓から出て森を駆け抜けてください。村らしきところがあります。そこまでいければ、奴らから逃れられるかもしれません」

「アンリ・・それはダメです。ここで戦いましょう」

「お嬢様・・ハンドランチャー一丁とお嬢様のハンドガンだけでは、2人とも死にます。私のことなら大丈夫です」

アンリはこの少しだけ年上の主人に片目をつぶると、持っていたハンドランチャーを手渡した。エネルギー弾の充填ランプが一つ消えて5つになっている。

「武器もなしにどうするの。私と一緒に逃げましょう。これは命令です。アンリ・・」

「父上から昔、聞いたことがあります。戦場では主人の命を第一に考え、そのためなら主人の命令に対しても拒否ができると・・。それがナポレオン時代から続くノインバステン家の執事ジャービス家の権利です」

「それにお嬢様・・あのトレーラーの荷物を届けることは、残された人類の希望なのです。生き残ればそれも可能です。あの兵器は、

お嬢様がいなければ意味がないのです」

アンリの必死の願いにアクリエールもうなずくしかなかった。年下の少年を置いていくことにためらいはあったが、自分がここにいることで危険の度合いが下がるわけでもない。むしろ、自分がいない方が逃げられる可能性があるかもしれない。自分が中学生の時に付き人となった１０歳の幼い少年が、その１日目からアクリエールが驚くほど機知に富み、任務をこなし続けた姿に絶大な信頼を寄せていた。

（アンリなら生き残れる・・・。）

「分かりました・・・。アンリ・・死んではなりません。最後まであきらめないで・・」

がらりと開けた窓から、アクリエールは振り返った。にっこり笑う少年は、フォークリフトに乗り込み、軽く会釈をした。アクリエールはそれを見て、小さくうなずき、斜面へ転がり落ちた。

お嬢様が脱出した窓から冷たい風が吹き込んでくる。勇気ある小さな少年は意を決して、鍵を回した。エンジン音が響き渡る。レバーを押して前進。１つのドラム缶をアームで持ち上げる。それと同時に鉄の扉が切り裂かれ、大きな巨体が２体侵入してきた気配。かまわず、アームのレバーを上昇させ、途中で止めると猛スピードでドラム缶の列に突っ込む。

後ろでハンターが襲い掛かってくると同時に、フォークリフトのアームの爪がドラム缶に突き刺さり、中身が噴出す・・すかさずライターの火花が炸裂し、小さな灯火がスローモーションのように投げ出された。

死闘？

草の斜面を転げ落ちたアクリエールは、すばやく立ち上がると森に向かって走り出す。だが、数歩も行かないうちに倉庫が大音響と共に爆発する音に振り返った。赤々と燃え上がるその光景に立ちすくみ、両手を口に当てて嗚咽をこらえた。アンリがやったのだろう。

（私を逃がすために…）

あの炎ではさすがのハンターも無傷ではいられないはずだ。だが、同時に忠実な少年執事の命も無事であるはずがない。

涙が頬を伝い、ぽたぽたと地面に落ちた。だが、赤々と燃える倉庫から黒い影が跳びあがる光景が目に入った。

（奴らは死んでない…）

アクリエールは走り出した。少年が言ったとおり、ここをいっきに抜ける。ここで自分が死んではアンリに申し訳がない。走りながら、ハンドランチャーのスイッチを入れる。ギュイイイイイン・・。充填されるエネルギー・・。バキバキと枝を折りながら近づく敵に振り返って発射・・

放出されたプラズマエネルギーが、ハンターに命中する・・だが、Ｈシールドがそれを跳ね返す。およそ３０メートルの距離・・Ｈシールドを突破する確率は２１．５％だ。はじかれてもおかしくはない。

アクリエールは再び、走り始めた。数秒で足音が近づいてくる。５秒で次のエネルギーが充填完了。振り返る・・・だが、すぐそこ

に奴はいた。

「こ・・この～っ・・・」

迷わず、発射のトリガーを引く。至近距離なら５０％を超える・・だが、はじかれればアクリエールの命はない。Ｈシールドに当り光に包まれる・・突破できるか・・・。

その願いは通じた・・シールドを突破したプラズマエネルギーは少し反れて、ハンターの右肩を吹き飛ばした。その衝動で１０ｍ後方へ吹き飛ぶハンター・・。だが、致命的なダメージではない。すぐさま、次のエネルギー弾を充填・・

（１・・２・・３・・４・・）

５秒は致命的なくらい長く感じる。高速再生が始まるハンターの右肩はたちまちふさがり始める。

（・・・５）

ランプがつくと同時にトリガーを引く。

エネルギー弾がハンターの中央を射抜く・・が・・Ｈシールドが浮かび上がり、それをはじいた・・。

（この距離で・・確率は４０％以上・・しかも１発目命中で弱っているのにもかかわらず・・）

この不運を嘆く暇もなく、すぐ様、３発目の充填にかかる。右肩はほぼ再生完了したハンターはすかさず攻撃態勢に入る。軽く沈み込

む・・跳びかかるつもりだ。

１０ｍの距離などものともせずに、自分に掴みかかることは間違いない。早く・・充填を。

跳びかかる巨体・・・ランプが３つ・・４つ・・。するどい爪がアクリエールの両肩に掛けられる瞬間、ほぼ０射撃でハンドランチャーからエネルギーが放たれた。シールドを突き破り、どてっぱらに大きな穴が開く。

（１体・・撃破・・。あと１体。）

ハンドランチャーのランプはあと２つである。もし、追ってくるハンターが１体以上なら、アクリエールの生き残る確率は相当低下する。ＰＢ装備の切り札「プラズマランチャー」がタマ切れを起せば、あとはハンドガンに充填したＰＢ弾（ボツリヌス毒素が先端に仕込まれた特殊弾。ハンターの超再生を止める効果があるが、Ｈシールド突破力はかなり落ちる。）しかない。弾倉に１４発。アンリにもらった予備マガジンが１本。計２９発。これだけで生き延びられるか・・。

暗闇を走る彼女の前方に黒い大きな影が立ちふさがる。とっさにハンドランチャーの引き金を引く。白い光が発射されるが、それは虚空に消えた。ターゲットは左に避けるとするどい爪を一振りした。それはアクリエールの左肩をかすり、強化ファブリックで作られた軍服をいとも簡単に破り、美しい皮膚を傷つけた。その衝撃で吹き飛んだハンドランチャーが孤を描いて地面に落ちていく。アクリエールは受身を取りながら草地に体を投げ出すとそのまま転がり、大木の後ろへ身を隠す。すぐ腰からハンドガンを取り出す。そして間髪いれずに狙撃。３発の弾丸が発射されるが虚しくもシールドには

じかれる。

「お願い・・・当って・・。」

立ち上がって連射する。ハンターは猛然と前進してくる。
弾倉がカラになるまで打ち続ける。

（5，6，7、8，9・・・。）

「１０発目。」

ほとんどはじかれた２０ｍｍ弾の１発が皮膚に命中。その衝撃でハンターの動きが止まった。

「グギュル・・グギュル・・。」

強靭な体力を誇るハンターもボツリヌス毒素の影響で体が痙攣を起し始める。さらにアクリエールの攻撃は続く。弾倉がカラになるまであと５発打ち、そのうち１発が新たに命中。ハンターの痙攣が激しくなり、バタリ・・と倒れた。

（倒した・・。）

辺りが静寂に包まれた。左肩からわずかに滲む血をハンカチで押さえ、きつく縛るとアクリエールはハンドガンの弾倉を抜いて予備弾倉を装着した。飛ばされたハンドランチャーにあと一発エネルギー弾が残ってはいたが、探す暇はない。足取り重く、村へ向かって歩き始めた。

（とにかく・・あそこへ行って朝まで待とう。）

死闘？

村というべきか、村だったというべきか・・。ほとんどの建物が壊され、瓦礫と化していた。なんとか建物の形態を保っているのが3軒ほど。村の中央には小さな教会があり、大きな十字架のついた屋根に鐘が吊り下げられている。だが、それは長い間鳴らされていないのだろう。くすんだ色が重々しく目に映る。アクリエールは、一軒の家から煙が出ているのに気が付いた。アンリが言っていた明かりというのは、この建物から発せられたものだろう。

（誰かいる・・）

この地球上で火を使うのは人間しかいない。

かつて人間は火を手に入れ、それによって自分たちよりはるかに強い動物たちを従えてきた。ある神話によれば、何も能力を持たない人間に同情した神が神の神殿から火を盗み、人に与えたという。その神は罰として、山の頂に鎖でつながれ内臓を鳥についばまれる苦痛を気の遠くなる時間与えられたという。火を与えられた人間は、その絶大な力を使い、地球上の動物たちを従え、そして人間同士の醜い争いを何千年と繰り返してきたのだ。だが、その人間の火を恐れぬ生物（ハンター）の出現で人間はこの地球上から消滅させられようとしている。

アクリエールは明かりのついた家のドアを押した。ギーッという軋む音を立てて、ドアが開く。ゆらめく炎に人の影がゆらめく。

「誰か・・誰かいるの。」

アクリエールはそっと呼びかけ、その影に数歩近づいた。古びた暖炉に火が入っており、その前に毛布にくるまった少年が寝ていた。・・自分とさほど年は違わない・・黒い髪に黄色の肌・・・（東洋人・・チャイニーズ？）あどけなさが少々残るが整った顔立ちは、ヨーロッパ系の男にない、エキゾチックなある種の魅力を感じさせずにおれない。

コト・・・床に落ちていたものにアクリエールのブーツが当り、音がなった。眠っていた少年の目が突然、開いた。黒い、大きな瞳がアクリエールを捉える。

「誰！」

叫ぶと同時に毛布が宙に舞い上がる。アクリエールは思わず身構えた。だが、少年は一瞬で彼女のふところに入り込み、おもいっきり体当たりをしてきた。男と女の体の違いである。少年といっても同年代の男子にタックルされては、いくら軍の訓練を受けてきたアクリエールでも後ろに倒れるしかない。少年は馬乗りになって左手でアクリエールの首を押さえ、右手は胸を押さえつける。

「うっ・・・。」

思わずうめき声を上げるアクリエール。だが、少年の方もとまどった。予想外の右手の感触・・弾力があり右手の力を跳ね返す。ポヨンとした感触は今まで触れたことのない体験だ。だが、この感触は想像では知っている。女性のおっぱい・・。

「お・・女？」

押さえ込んだ人物の顔を見ると苦しそうに目をぎゅっと閉じてはい

るが、金髪の長い髪の美女であり、おもわず後ろを見ると乱れたスカートから2本の細い足があらわになり、しかもめくれたスカートからタイツ越しに白いパンティーがちらりと見える・・。

「わ・・わわっ・・。」

奇妙な叫び声を上げて、少年は飛びのいた。押さえつけられていた圧力から開放されたアクリエールは、乱れたスカートを片手で抑えて壁まではいずった。驚いてこちらを見ている少年の黒い瞳と目があったが、すぐ横の窓に映った影に吸い寄せられる。

「ハ・・ハンター！」

窓ガラスが割れて窓枠と壁を吹き飛ばし、先ほどまで死闘を演じてきた相手・・ハンターが立ちはだかった。暖炉の炎の明かりにゆらめくその姿は、2m超のクマを思わせる巨体。ハンターと呼ばれる新生物は地球上の動物を模したタイプがあり、こいつはクマに似た体つきからハンターB（ベア）と分類されている。

アクリエールの脳裏にその危険度が検索される。攻撃力はハンターの中でも上位、強烈なパワーで相手を殴り、するどい爪で切り裂く。巨体に似合わないスピードで移動し、驚異的な再生能力とHシールド能力で、人間の武器による攻撃を排除する。こいつを倒すには戦術核兵器並の圧倒的なエネルギーで体を構成する細胞を原子単位で破壊するしかない。

「ぐあああああ・・。」

すさまじいハンターの咆哮・・。これだけで人間は動けなくなる。

振り返った少年もまさに動けなくなった獲物・・猛獣に狙いを定められた小動物状態であったはず・・・そうアクリエールには思えた。そして、自分のせいでまた一人、人間の尊い命が失われることも・・・。

だが、彼女の悪夢は覆された。先ほどまでアクリエールを押さえつけていた少年は、アクリエールに襲い掛かった時と同じスピードでハンターに殴りかかったのである。

「うるるううああああ～。」

人間の素手での攻撃など、Ｈシールドを装備し、銃撃を遮断するハンターに通るわけがない。だが、Ｈシールドの抵抗は瞬時で終わり、少年の拳が反対の顎下の首根っこに炸裂した。信じられないことにあの巨体のハンターＢが素手のパンチを受けてがくっとひざを折り、よろよろと後退したのである。

「あなた、これを・・。」

アクリエールは腰につけていたハンドガンを少年へ投げる。ゆっくりと回転する銀色に光る武器は振り返った少年の右手に納まる。すぐさま、第二撃、右手が横に振られ、ハンターのＨシールドをぶち破り、さらにハンターの首根っこに銃口を突きつける。

「ＴＨＥ　ＥＮＤだ、化け物！」

ハンドガンの発射音が３回鳴り響いた。

「ぐおおおおおお・・・っ。」

断末魔の咆哮にアクリエールは目を見開いた。銃弾を受けて2，3歩あとずさりをしたハンターBの体が2，3度膨らんだと思うどす黒い血を吹きだして、後ろへ倒れた。

（う、うそ・・。こんな倒し方って・・。）

BP弾装備のハンドガンが命中すると、弾丸の先に仕込まれたボツリヌス毒素がハンターの体内に注入され、再生能力を司る神経が麻痺するとともに運動神経も一時的に麻痺させる。そこへ圧倒的な火力を叩きつければ、さすがのハンターも死ぬ。だが、この少年の場合、ハンドガン3発で倒した。戦術核兵器並みのエネルギー弾であるプラズマランチャーならいざ知らず・・。だが、アクリエールのコンピューター並の記憶能力は、脳裏に少年がハンターBに対する攻撃は常に一箇所であったことをはじき出した。

「あ、あなた・・、分かるの・・？」

ひざを折り、荒い息をしている少年に声をかけた。だが、返事の代わりに振り返った少年の目が光った。（正気じゃない。）そう思った瞬間、少年が跳びかかってきた。

「ぐっ・・。」

小動物がくびり殺される様のように、アクリエールの細い首は壁に押し付けられ、少年の右手の指が首の肉に食い込む。必死に両手で引き離そうとするが、非力な女性の力ではどうにもならない。少年の左手が軍服のボタンを巧みに外し、右胸に侵入してくるのが分かった。少年とは思えない手際のよさだ。

（い・・嫌・・わ・・私を陵辱しようというの・・。）

遠くなっていく意識の中でアクリエールは、無意識に膝げりをくりだした。所々，裂けたタイツから、魅惑的な太ももが露になったが、そのタイミングと当ったところが正にクリティカルヒット・・。少年はどっと、その場に倒れた。

アクリエールも激しい呼吸を繰り返し、その場に崩れ落ちた。気を失ったのかピクリとも動かない少年を見て、これまでの緊張がぷつんと切れた音がした。激しい疲労が体を襲い、アクリエールもそのまま意識がなくなってしまった。

脱出？

パチパチという乾いた音、香ばしい香りで聴覚と嗅覚が刺激され、うっすらと目を開けた。視界には見慣れない天井が映り、頭の中をいろんな情報が駆け巡り、意識がはっきりとしてきた。思わず上半身を起すとあの少年が傍らに立ち、黙って陶製のマグカップを差し出しているのに気づいた。マグカップの中は湯気を立てた黒い液体・・コーヒーが入っている。こうばしい香りの原因はこれであった。

「あ、ありがとう」

イギリス貴族のお姫様としては、本当は紅茶の方が好みではあったが、そんなことを思うまでもなくごく自然に受け取った。だが、記憶が戻ってくるにつれて、この少年がハンターBを生身で倒したこと、そして自分に襲い掛かってきて危うく殺されそうになったことが蘇ってきた。さらに自分の上半身がブラジャー1枚、下半身はパンティ1枚であることに気づいた。羞恥心でかあーっ・・と血が頭に上ってきた。だが、

「ご・・ごめんなさい。よ・・汚れていたから、せ・・洗濯を・・」

と慌てて話す少年と洗って火の傍で乾かされている軍服を見て、思わずクスリと笑ってしまった。少年の言葉がきれいなフランス語であったこともアクリエールに余裕を与えた。

「フランス語、上手ですわね。あなた、見た感じ中国人みたいだけど」

「日本人です。フランス語と英語は話せますけど、ドイツ語は苦手

です」

日本は東洋の片隅にある島国である。経済大国で柔道や空手といった武道があり、歴史のある国である。イギリス人であるアクリエールにとっては、アジアの中では親近感がわく国名であった。

「私はフランス語も話せますけれど、日本語も少々話せます。あなたのお名前は何ですか」

アクリエールは数あるマスターした外国語の中から、日本語の語句を探り出し、初歩的なダイアログを披露した。

「ぼ・・僕は、高杉紳作・・17歳です。あなたは・・」

日本語で返す少年は、フランス語よりも幾分幼い口調でそう答えた。

「アクリエールです。年は・・」

「ああ・・・ごめんなさい。女性に年を聞くのは失礼でした」

少年は慌てて、そう英語で答えた。日本語ではなくて英語で出てくるのが不思議で思わず、

「あなたより2つ年上。お姉さんよ」

と答えてしまった。お姉さん・・という響きに少年は顔を真っ赤にしてアクリエールの毛布からちらちら見える胸の谷間を一瞬見たが、慌ててそっぽを向くと白いバスタオルを差し出した。昨日の凶暴な感じとは正反対である。

「シャワーを浴びていいですよ。用意しましたから・・」

そう言うと目でシャワールームの場所を示した。

廃村の建物にしては、設備が立派に整っており、シャワーも熱いお湯がたっぷりと注がれる。アクリエールの白い肢体に熱い液体がまとわりつき流れていく。熱いシャワーを浴びるのは何日ぶりであろうか・・。もっとも、昨日の戦闘がなければ、今頃はＥＵ軍の戦略空母の中で浴びていたかもしれない。

（戦闘・・）

頭に浮かぶのは昨日のハンターＢとの死闘。そして、少年の尋常でない戦闘力。

（日本人といっていたが、日本人はあのような技を使うのであろうか？サムライとかニンジャとか昔は存在したという国だから）

だが、相手はハンター・・人間の天敵であり、その戦闘力は人間の比ではない。それに日本人が、それも高校生ぐらいの子どもが一人でフランスの片田舎にいること自体ありえないことである。疑問の数々を整理して、質問文に変えるとバスタオルで体についた水分をふき取る。シャワー室を出るとかごに着替えの下着と乾いた軍服がきれいにたたんであった。

（アンリみたいね・・。ただ、ちょっと詰めが甘いけれど）

用意された下着は女性用であったけれど、質は庶民レベルでサイズも少々小さく、アクリエールのお尻が少しはみ出してしまう。だが、

こういう状況で文句は言えない。だいたい、女性用の下着がどうして用意できるのかさらに疑問が増えてしまった。
（ブラジャーはともかく、パンティはパッケージのまま、おそらくコンビニエンスストア等で売っている製品そのままである）

着替えて部屋に戻るとパンと目玉焼きが用意されていた。アクリエールはイスに座ると青い美しい瞳で少年を毅然とした目で見、そして先ほどの質問を繰り出した。

「あなたはどうしてここに住んでいるの」

「他の人は」

「食料や物資はどうやって手に入れているの」

「あなたはここで何をしているの」

「目的は」

そして、一呼吸おき、もっとも聞きたい言葉を響かせた。

「ハンターの弱点が分かるの？」

少年は目玉焼きをほおばり、黄色い黄身をつるりと飲み込むと、おもむろにこういった。

「弱点が分かると言ったって、お姉さんには見えないの？あの赤い点・・」

「えっ・・」

アクリエールは皿に落とした視線を上げて、少年を見やった。

「赤い点って、そんなの見えないけど・・」

先ほどのハンターBの首根っこには、そんな赤い点があるようには見えなかったし、アクリエールも先ほどまで、何度も戦闘をし、ハンターBを見てきている。そんな目立つような外観的な特徴が分からないわけはない。

「あるさ、さっきの化け物のタイプだと首根っこにあることが多いけど、たまに肩とか、頭の後ろとか、必ず1点ある。違う奴だと2箇所赤く光っているから、その2つを潰さないといけないけど・・」

アクリエールは立ち上がり、身を乗り出して少年・・紳作の顔を両手で挟み、その顔をまじまじと見た。吸い込まれるような黒い瞳・・・。

（この少年には、見える・・）

脱出？

ハンターと名づけられた人類の天敵は、人を食い殺すという習性とすさまじい攻撃力だけが脅威ではない。それなら、人間をはるかに凌駕する戦闘力を持つ動物はたくさんいる。クマ然り、ライオンに代表される大型猫類然り・・。だが、それらの動物を打ち倒す武器が人間にはある。槍や剣などの刃物はもちろん、銃に至ってはか弱い女性や老人ですら、銃を使えばそれら動物を狩ることは可能である。

だが、ハンターには銃弾を受け付けないHシールドなる拒絶する空間を身にまとっている。この空間の存在は、長年の研究でも未だに解明が完全でなく、確実に打ち破る方法は発見されていない。ただ、銃弾のような高速スピードでぶつかる物体や、高速レーザーなどは、貫通する確率が低く、逆に剣や打撃系の武器などスピードの遅いものは比較的容易に貫通できることが分かっている。だが、シールドを破ってハンターの体にダメージを与えても超速再生で直ってしまう。ハンターを倒すには再生が間に合わない程のダメージを瞬時に与えるか、膨大なエネルギーで原子レベルまで破壊するかである。

ハンター出現時に人類は、戦術核兵器を用いて殲滅を図ったが、１０体のハンターに対して倒せたのは３体。Hシールドは核の熱すら阻害し、体へのダメージを軽減。放射能汚染にもめっぽう強く、核の多用で逆に人間の方が絶滅の危機に陥った。

人間による直接攻撃でHシールドを破ったとしても、ハンターのすさまじい攻撃に生身の人間が耐えられることは不可能で、結局は狩られることになる。だが、わずかながら、ハンターのある部分に相当の打撃が当ると一撃で倒せることもこれまでの恐怖の歴史の中

で人は学んでおり、それを「蜂の一刺し」「毒蛇の一撃」などと言って、奇跡として言い伝えられている。

（その奇跡の打撃ポイントがこの少年には分かるのか？）

昨日のハンターの襲撃場所であるガソリンスタンドへ向かう林の小道で、アクリエールはタカスギシンサクと名乗った日本人の少年の後姿を見つつ、頭の中の複雑な思考回路をつなげてははずしを繰り返していた。結局、この少年（アクリエールの２つ下だけだが）が、なぜ、このフランスの片田舎にいたのか不明。数年前から日本人の祖父と２人でヨーロッパを旅行していたこと。相当量の食料や生活品が村に隠されていた軍用トラックに用意されていたこと。少年自身が目ざめて、一人になっていたことを知ったのが１ヶ月前のこと。それ以前の記憶が断片的に失われていること。驚いたことに、ハンターが出現して人類が存亡の危機にさらされたこの５年程の出来事の記憶がまったくないのである。

そして数カ国語を操る語学力。昨夜、ハンターを倒した性格の豹変ぶりも不可解である。

だが、彼女の目の前を歩く少年は１７０ｃｍの身長のアクリエールより５ｃｍほど低く、体つきも華奢であり、とてもハンターと渡り合ったとは思えない体である。

現場についた。

凄惨な光景が広がる。首のないまま、銃座に座る兵士。あちらこちらに食いちぎられた人間のパーツが転がる。ジープは潰れてひっくり返されて、機関砲の空薬きょうが無数に転がっている。

「少佐、こっちに人が・・まだ息がある。」

少年の声がアクリエールに届いた。いつの間にか「お姉さん」から「少佐」に呼び名が変わっているのは、単に呼びやすいからであろう。同じ年下でもアンリなら、自分のことを「お嬢様」と呼んでいたが、それもよく考えればおかしな話だ。年上に向かってお嬢様だなんて・・・。

（アンリ・・）

生き残っている人がいると聞いて、アクリエールはとっさにアンリのことを思い浮かべた。
自分を倉庫から脱出させて自ら残った忠実な少年。その倉庫らしきものがあった跡が目の前に見える。

アクリエールは倉庫へ駆けようとしたが、少年の声はもっと手前であった。

「シンサク・・・。どこ？」

いくつかのドラム缶と古タイヤの山のかげに軍服を着た人間が倒れている。紳作が軍服の首元を緩め、耳を当てて心音を確かめている。レイノルズ中尉であった。頭から血を流しているものの、体はどこも食いちぎられた跡はなく、意識を失っているだけのようであった。紳作も「心臓は動いていて、息をしています・・。」と手短にいって、ハンカチで頭の血を拭っている。出血もすでに止まっているらしく、ハンカチが真っ赤に染まることはなかった。

「あのトレーラーに中尉を運んで。」

アクリエールは手短にそう命令すると、頭の中はすでにアンリのこ

とでいっぱいであり、最後に分かれた倉庫跡へ自然に足が向かった。

倉庫は爆撃の跡のように瓦礫の山であった。大きな屋根も積まれていたドラム缶もあのフォークリフトもあたり一面に残骸となって広がっているだけである。

（これでは助かりっこない・・・。）

無性に悲しくなり、目に涙があふれてきた。思えば、もっと早くこの感情が訪れてもよかった。あの爆発を目撃したときに一瞬、そう感じたが。きっと、ハンターの攻撃で今まで興奮状態であったのであろう。この凄惨な現場を見て我に返ったのであろうか。昨日の出来事が思い出される。倉庫の端、昨日、アクリエールが飛び出した窓のあった辺りへ歩み寄ると、草に覆われた急傾斜が続いている。ここを転げ落ちて自分は何とか逃げ延びたが、アンリは倉庫を爆破させて自分の逃走を助けたのだ。あの爆発に巻き込まれては、助かる術はない。

（偶然、窓側に吹き飛ばされない限り・・・。）

アクリエールの目に何かがきらりと輝くのが見えた。

急傾斜に足を踏み入れる・・・ずるりと滑って、思わず尻もちをついた。

「きゃっ・・・わわ～・・・」

そのまま、軍用のスカートがめくれて太ももが露わになる。だれも見ていないが、育ちのよさが反応して両手で前を隠したから、余計スピードがついてそのまま、滑り台のように

落ちていく。

ドサ・・・何かにぶつかって止まった。

やわらかい物体・・。

「痛ったた・・。」

長い足が絡み、自分の太ももの間に見慣れた顔を見てアクリエールは恥ずかしさよりも、涙があふれて声がでなくなった。

「ア・・・アンリ・・。」

「お嬢様・・はしたないです。プランタジネット公爵夫人ともあろうお方が、こんな破廉恥な姿を見せてはご先祖様に申し訳がたちません。」

いつもの忠実で、ちょっと口うるさい執事の少年である。

少年の右ポケットに挿した万年筆がきらりと太陽の光を反射した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1447ba/

彼女戦線異状なし

2012年1月14日10時46分発行